

序章：今一番クールな アーティスト、 マイケル・ジャクソン。

3回忌。ファンはそろそろ、その死をそれぞれのやり方で始末をつけ日常へと淡々と戻っているはずだ。寧ろ更なる苦難を乗り越えるべく後もう一步と進み、マイケルの不在を時折嘆き悲しみながらも健気に笑い、子を養い、あの時よりも飛翔している人だっていることだろう。そう、それが人生なのだから。もうマイケルがいてもいなくても、関係はないのである。それだけの時が経ったはず。マイケルが東北の人に何かをする、いたら絶対していただろう。でもないのだ。いてもいなくても、いたからいないからでもない。マイケルはいないのだ。

でも、みなさん、そんな簡単にマイケルを忘れることなど出来ませんか。

コンラッド・マーレー医師がマイケルを殺した。僕はやはりそう思っている。11年5月9日に冒頭陳述が行われるはずが、9月8日に延期となった。マーレー医師は過失致死を認めるどころか、無罪を主張している。麻酔薬プロポフォールの過剰投与で死んでしまったマイケルだが、マーレーは致死量以下しかマイケルには与えていないとしている。あの6月25日、マイケルに一番近いところにいたのに、プロポフォールをマイケルの名誉のためにと（マーレー自身のためだと思うが）隠すため一時行方不明となり、結果蘇生処置をろくに行わず時間を無駄にかけ、呼んでから来た救急員にもプロポフォールの投与があったことをその時言及しなかったことで結果対応が遅れてしまった、そう伝えられている。僕はマーレーを医者として認めたくない。マイケル・ジャクソンは運命によって死んだのではない。殺されてしまったのではないかと。僕はもし裁判が不当に長引くことになるのなら、その判決が出るまで、マーレー医師はマイケルを殺した、と思いつけるだろう。確かにマーレーがマイケルを殺す必要性はない。もしあるのなら、何かの陰謀？とまで大風呂敷をひいてしまう自分がいたりする。その一方、

マイケルは強力な薬を怪しげな男から手に入れないならなかったほど精神的に病んでいた、とも考えられる。マーレーは怪しい男、マイケルに強力な薬を提供する事で多大な利益を得ていた、そうとも考えられる。あのコンサート直前にマイケルが死んでしまった、その事実。相当のプレッシャーはあったのは否定できないが、マイケルの意志でプロポフォールをそれほど大量に摂取する、そうは思えない。

マイケルはいない、その事実は変わらない。マイケルはもうライブを行うことも、新曲を作ること、日本に来て渋谷辺りでショッピングを子供たちと楽しんでいる所をファンに見つけてサインをねだられて、イイよ、なんてハニカミながらサインしてあげることもないのだ。しかし僕がマイケルに対して書けることは残されている。これからもマイケルの素晴らしい未発表曲が世に出る、そのことが如何に凄いことなのか。今までのマイケルに対するソングライティング、歌唱力、演奏力の理解が甘かったことか、弊誌Vol.119、そしてVol.127で2回マイケルを特集し、調べたことで思い知らされるにつれ、僕は今回『Invincible』のレビューだけでなく、そのリリース前後のマイケルのアウトテイクスを、現時点でわかっていること、ネットでついでこの間リリースした曲、わずか一秒のスニペットまで調べて、掲載することにした。つまりマイケルのラスト・アルバム『Invincible』をレビューしただけでは足りないからだ。マイケルの魅力はその後にあった、と言っても決して大げさな言い方ではない。いつものようにこの特集は『For The Record』の力を借りている。しかし今回の後半のレビューは今も尚流動的に情報が錯綜して流れているインターネット、ファン同士のコミュニティーから、手に入れた情報を多く載せている。個人で調べてブログに発表している人、血気盛んに論議しているファンのネット情報、本当に頭が下がる思いです。結果この特集が書けました。ありがとうございます。そしてこれからもよろしくお願ひします。後Vol.127に続き今回もこの特集を天国のおばちゃんに捧げる。この原稿を書いている最中に一周忌となる。無事に約束通り入稿出来ました、と先ほど報告した。